

平成ゆとり童話

僕式

研ぎ澄まされた思想の触先に乗れるのは、血を流した者だけ。刃でできた橋を渡るのは、そう、
楽しいやない。

見ろ。

老婆を背負った、青年。裸足である。

何歩進めるか。今さら、手遅れだ。

日が暮れる。青年の表情は逆光でよく見えない。黒い影が、歩を進めてゆく。

見ていた男が、煙草に火をつけた。

液体が、したたる。海と、同じ色。

「うまくいくと思うか。賭けてみるか？ 要は、信じるかどうかだろ。俺は、口が悪いんだ」

これが、この国の儀式。

男は、口から煙をはいた。

「死体は、重いって言うからな」

刃先。青年は、老婆を海に流した。鉛を、抱いている。これから先、もう、浮きあがることはないだろう。

青年が振り返る。

「航海を、続けようか」

手負いの修羅は、静かに言った。

血眼になって、夢を探せ。血眼になって、夢を探せ。

わざわざ、目指すなんて言うくらいだ。あるんだろ。どこかに。見えなくても。

流れ出るのは、そこまで行ってから。

足りなくなるのは、景色が白くなつてから。

血が足りねえ。

立ち会う者はいない。

鋒びついた刃を橋にして、危なげに渡ってゆく、ただの一人。見届けるのも、ただの一人。

きっと、二人は同じ夢を見ている。[了]